

報告要旨

- ①日本語クラスの受講生が日本に興味を持ったきっかけは、伝統的文化とサブカルに大別できる
- ②ラトビアは EU に加盟し、旧産圏の色は薄まっているがそれでもなおロシアの影響は強い。
- ③リガではクレカ文化が強い。また、公共部門での IT 活用が進んでいる。

■基本事項

- ・提出者氏名/所属 荻原秋穂/人文学部法経政策学科 4 年
 - ・派遣先情報 ラトビア大学, 期間: 平成 28 年 2 月 15 日~29 日
- 注記: []内の数字は, 文末の注釈と対応している。

■現地クラスでの指導内容

現地クラスでは初級と上級の 2 クラス展開を行った。昨年度及び一昨年度派遣されたハノイ農業大学(当時)とジョモ・ケニヤッタ農工大学と比較すると受講生の平均的な日本語能力は高かった。受講生からのリクエストも踏まえ、毎回「買い物」「勉強(以上初級クラス)」、「クレームと謝罪」「(日本の)犯罪と刑罰」(以上上級クラス)などとテーマを設定し、一回完結の授業を行った。これは自由参加制のクラスで、欠席しても次の出席意欲を損ねないためでもある。

初級クラスでもひらがな、カタカナは学習済みの受講生が大半を占めていたことから、構文を利用した会話に重点をおいた。上級クラスでは漢字をふりがなつきで積極的に用いるとともに、授業で扱うテーマに関連した日本の風習や社会制度等を積極的に取り上げた。質問も頻繁にあり、テーマから大きく逸脱しない範囲ですべて解説した。

なお、毎日の授業の大まかな内容や参加人数、要望それに反省点はノートに記録し、今後のチューターの参考になるようにしてある。ノートは報告者帰国後も滞在する学生に引き継いだ。

■日本語教室以外での活動

平日の自由時間は学生にリガ市内の店に案内され、当地の住民の感覚を体験した。週末も受講生に連れられて 30km 離れたスィグルダという古城都市やヨルマラというリゾート地に案内された。特にスィグルダでは現地の祭りに参加させてもらい、今も残るラトビアの文化に直接触れる貴重な体験をさせていただいた[1]。

■参加の感想

◇授業に関して

上述以外のラトビア大学の受講生の受講生の特徴として、

- ①インターネット環境が普及している影響からか、アニメやゲームといったサブカルチャー作品から覚えた口語(「やばい」等)を多く知っている学生がいる点、
- ②また一方で日本や中韓といった極東の伝統的文化に関心を持ち、「父上」や「切腹」といった時代劇的な単語をよく知り、漢字に興味を持つ学生がいる
- ③シェンゲン協定によるとみられる EU 諸国からの留学生の多さと受講生の英語能力の高さ

一が挙げられる。日本からの距離が近く、日本の社会トレンドや経済発展に関心の高かったベトナムや、あまりにも日本が遠すぎ、またインターネットの回線が細いことから日本のイメージの比較的薄いケニアの受講生とは明らかに異なる側面から日本に関心を向けている。日本からの距離や経済状況などの要因により日本に対する目の向け方に違いがあることに気付かされた。

◇ラトビア滞在を通して(関連事項: 目標①ラトビアの歴史や諸外国との関わりを知る)

【ラトビアとロシア】冷戦時代に東側に属し、冷戦崩壊後急速に東側に接近したバルト三国の経済的中核を担うラトビアであるが、博物館の展示や学生との話を通して、ロシアと政治的に急速に距離を離していることを感じた。ラトビアの首都リガは世界遺産に認定されている旧市街を除けば共産圏的な街並みが広がっているが、各種博物館の展示はソ連時代を暗黒期的に扱って

平成 27 年度新興国学生大使派遣プログラム 実施報告書

いるものが多く、また学生のロシアに関する話題のトーンも暗いものが大半を占めた。ただ、料理などといった文化的な面ではロシアの影響を今も色濃く残していることがわかった。ロシア語が話せる受講生も多い。

【ラトビアと EU, また EU について】一方で、ラトビアはかなり急速に西側諸国に接近しているように思えた。2004 年に EU に加盟したのを皮切りに 2014 年には共通通貨ユーロを導入するなど、明確な EU 接近への動きを見せている。特に若年層は教育の効果もあり英語がとても流暢に話せる。近隣諸国のみならずドイツからの観光客も多いようで、多くの場所でドイツ語による掲示や解説がなされていて、ドイツ語が話せる受講生もいた。

在ラトビア日本大使館の「ラトビア月報」によれば、ロシアとラトビアの二国間では輸入禁止措置[2]やラトビア登記当局によるロシアテレビ局の申請却下[3]などの政治問題が発生している。ただ、ロシア語話者も未だにラトビア国民の 3 割ほどおり[4]、上で述べたとおりロシアの文化的影響が残る。一方、経済・政治の両面で EU の一員となったことで、新たな問題も発生し、例えば最近欧州を悩ませている難民問題の火種が、この国でもくすぶっている。受講生の一人がラトビア国内における難民問題を語る際に言っていた“(Latvia is) not so much near, but not so much far(from Syria)”という言葉は文化的にロシアの影響を強く残しつつも、EU の一員となり難民問題をはじめとした立ちはだかる困難への責任を果たさなければならないというラトビアの微妙な立ち位置を鮮やかに描き出していると思う。

【ラトビアで目を見張った ICT 応用例（関連事項：目標②）】

①路上駐車における SMS による料金支払いーリガ市内の駐車可能区域で駐車料金の支払いを SMS と Web サイト、それにクレジットカードでその場で簡単に行えるようになっている。これにかぎらず、小規模店舗でもクレジット決済が容易に行うことができ、キャッシュレス化が進んでいると感じた。ただ、Square(R) のようなタブレットを利用したレジ制度の導入例は殆ど見られず、アメリカに見られるような現金払いを受け付けない店舗はないようだ。

②公共交通統一乗車券“e-talons”ーリガ市内の公共交通（バス、トロリーバス、路面電車）共通の乗車券である。基本的に信用乗車方式を採用していて、自分でカードをタッチする。頻繁にタッチしたかどうか（適正に料金を払ったかどうか）のチェックがある。バスも連節バスを採用していて、e-talons と合わせて多くの人々が、効率よく乗り降りできる仕組みが確立されている。IT の活用によって、社会の人の動きをスムーズにする、素晴らしい取り組みと思った。

■目標とその達成度について

①ラトビアにおけるロシアや EU に対する感情を聞き取り、まとめる

②街頭で利用されている ICT 技術のうち、日本でも応用できそうなものに対する考察

→ここまでに記した通りである

③受講生に日本文化を理解してもらう（文化を扱うコマを積極的に導入する）

→「伝統的な」文化だけでなく、近代的な社会生活における様々な文化や制度を取り上げた。例）刑罰制度、犯罪、教育制度など。受講生からもラトビアの制度を教えてもらい、比較することができた。また、受講生の中に会計監査を仕事としている方がおり、報告者の専攻である会計の話で盛り上がった。

■今後の展望

上記に記したとおり、地理的にも文化的にもロシアとヨーロッパの架け橋を担えるラトビアですが、その立位置故に難しい舵取りを迫られています。このような世界の潮流の全貌を把握するのはとても難しいですが、そのかけらはなにげない話題の隅に確実にみることができました。このような大きな流れのかけらを見つけ出す能力は、学問のみならず社会生活の基礎になるであろう国際情勢を把握するために不可欠です。しかし、その能力の研鑽には、海外志向ばかりではなく、“足元の”国内の問題により目を向けることが重要なように思います。日本国内の事情についての知識がない事柄は、外国の事例を目の当たりにしても関心の輪に入らないからです。私も、今回知識不足によって、無意識のうちに多くの学びの機会を逃しているはずで、地域の、そして国の最高学府として、グローバル志向でもなく東北ローカル志向でもない、もう一つの志向の学生が必要と感じます。それが、国内他地域志向の学生だと思います。

平成 27 年度新興国学生大使派遣プログラム 実施報告書

山形を含む東北地方はいまだ閉じられた地域です。外国人観光客も少なく、首都圏志向が特に強い地域です、山形大学も人文科学系の学部では大半の学生が北関東以北の出身です。山形には決して学べないような国内の事情を学びの場に持ち込み、刺激を相互に与える環境が必要だと思います。同志社大や APU が行っている「国内留学」[5]のような国内の他地域に居を据えて学に励む制度が創設されれば、毎年少数ながらそのような知識を持ち込む学生が生まれます。山形大学が他大学から受け入れる国内留学生も新たな視点を他の学生に与えることと思います。当然、国内留学生に東北・山形のことを知ってもらう機会にもなります。4年間の山形大学での経験を通して、誠に僭越ながら提案をさせていただき、報告の結びとします。

■注釈

[1] 現地のウェブサイトには祭りの様子がアップされている。<http://www.turaidamuzejs.lv/galerijas/pasakumu-fotogalerijas/pasakumi-2016/?album=18&gallery=259>

[2] 在ラトビア日本大使館(2015).『ラトビア月報【2015年6月】』
<http://www.lv.emb-japan.go.jp/japanese/report/201506.pdf>

[3] 在ラトビア日本大使館(2015).『ラトビア月報【2015年8月】』
<http://www.lv.emb-japan.go.jp/japanese/report/201508.pdf>

[4]堀口大樹(年不明).『ラトヴィアにおける言語状況と言語政策・言語教育政策』
p29 http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/EU/EU_houkokusho/horiguchi.pdf

[5]同志社大学での実施例。
https://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/credit_transfer.html

■参考文献

「地球の歩き方」編集室(2015).『地球の歩き方 A30 バルトの国々2015~2016年版』株式会社ダイヤモンド・ビッグ社.